第3回 散居村の保全と活用シンポジウムの記録【要約版】

- 1 日 時 平成25年1月27日（日）13:30～16:17
- 2 会 場 砺波市文化会館 多目的ホール（砺波市花園町1番32号）
- 3 テー マ 散居村の活用と地域の発展
- 4 主 催 散居村の保全と活用シンポジウム実行委員会
- 5 後 援 富山県、砺波市、砺波市地区自治振興会協議会、砺波商工会議所、庄川町商工会、特定非営利活動法人 砺波土蔵の会
- 6 これまでの経過 《説明者》 島田 繁則（実行委員会 委員（砺波市企画調整課職員））
- 7 パネルディスカッション「散居村の活用と地域の発展」
《パネリスト》 尾田 武雄 氏（砺波市空き家再生等推進協議会 会長）
川邊 陽子 氏（主婦）
原野 博明 氏（サンエー建工(株) 代表取締役社長）
本江 哲 氏（(公)となみ青年会議所 砺波コミュニティー委員長）
宗景 昭 氏（(社)日本造園組合連合会 富山県支部長）
《コーディネーター》 出村 忍 氏（特定非営利活動法人砺波土蔵の会 理事）
- 8 主催者関係 《主催者挨拶》 舘 康弘（実行委員会 副代表（砺波市地区自治振興会協議会 前会長））
《閉会挨拶》 中西 美代（実行委員会 委員（となみ野農業協同組合女性部長））
《司会》 構 富士雄（実行委員会 委員（砺波市都市整備課職員））
- 9 参加人数 約190人
- 10 記 録

◆主催者挨拶（舘 康弘 実行委員会副代表）◆

砺波平野の散居村は全国的に素晴らしいものの、この景観に見慣れてしまっています。昨年11月の2回目のシンポジウムにおいて、「地元にて無関心でないか」という御意見があり、「無関心ではいけない」と思いました。

今回のシンポジウムでは、市民自らが保全活動に御協力して意識を高め、新たな出発点とするため、「散居村の活用と地域の発展」をテーマに、市内在住の各方面の方々によるパネルディスカッションを予定しており、地域における新たなまちづくりの参考にしていただければと思います。

◆これまでの経過（島田 繁則 実行委員会委員）◆・・・第1回及び第2回の要約版を参照願います。

◆パネルディスカッション◆・・・補足意見、聴講者からの質疑応答は割愛

本江： となみ青年会議所の活動の中で、地域を顧みる機会が非常に増え、改めてこの地域の良さを実感しました。

その一つは、田舎でありながらも生活に不自由しないことにあると思います。しかし、交通弱者にとっては不便なのかもしれません。また、砺波地方における中核的な商業施設が多いことに加え、散居村などの恵まれた自然環境と居住空間があります。これらの魅力を生かさなければ、地域の活性化や発展はないと思っています。

こうした状況を市民が意識していくことが最も必要であり、市民1人1人の地域愛を深めるとともに、社会全体に広げるなど、地域創造と発展に向けての活動として人づくりを中心に、まずは進めていくことが大切であると考えます。

宗景： 私たちは、日頃から地球環境、温暖化防止などエコロジーの取組を進めていますが、屋敷林はそうした取組の後押しをしています。寒さや暑さを和らげるほか、空気の浄化や循環型の生活の一助となっています。

昨年4月の暴風により、屋敷林の全滅という御宅もございましたが、ただ倒れたものを切って伐採するだけではなく、倒れたものをいかに地域で活用していくかということも皆さんで考えました。そこで、秋にカインヨ倶楽部の皆さんが主体となって、これからはスギじゃなく違う木を植えればどうかということで植樹会が開催されました。このことは、個人の家でのメリットだけではなく、砺波平野全体に与えることを理解しながら、屋敷林を地域全体で活用することも必要でないかと思っています。例えば、屋敷林を守っておいでる家を見学して、砺波を良くしていくことも考えていかなければならない。

原野： 暖炉とか薪ストーブとかは、寒い冬の生活の中で昔から火というものは欠かせないものであった。また、囲炉裏は暖を取るもののほか、砺波地方独特の食文化を作り上げ、家族そして地域住民とのコミュニケーションを促進する重要な役割を果たしてきたと思います。

最近、煙突のある家とかは、どのような生活しておられるのかなあということで、すごく楽しくなります。中に入ると、人々が集まって、鉄瓶にお湯を沸かしてコーヒー、お茶が、大変おいしく飲めます。最近若い人の場合は、ピザ、お餅とか子どもさんの焼き芋などを食べるなど、お持ち成しの際の道具として使用

されているのではないかと考えています。夜になると赤々とした炎が癒やしを誘って、部屋の雰囲気作りのインテリアとしても重宝されており、こうした、火の役割を再認識することによって、心豊かな生活を目的とした一つの道具として使われているのではないかと考えています。

川邊： 縁あり砺波に嫁ぎましたが、この地は孤立した雰囲気があるとともに、夜は暗く、とても寂しさを感じていました。また、冬の生活においては、敷地が広いことで雪かきなどが大変であり、自宅に除雪機があることにも驚きました。

しかし、家々が離れている散居村であることから、周囲に気を使うことが少なく、家族との一体感があります。一方、近所付き合いが少ないのかと考えていましたら、地域活動が充実していることに驚き、主人が子どもを連れていろいろな自治会の行事に参加をして楽しんでいます。

ここ砺波は、のんびりと暮らし、安らぎや癒やしといった精神的な豊かさが実感できます。地理的条件が良く、日常生活に不便さを感じることもないので、自由に移動できる手段があれば生活しやすい地域だと思います。

尾田： 砺波土蔵の会の御世話をしています。平成21年にNPO法人の認可を受け、何か実践しなければというときに空き家調査をやらなかったかと市のほうから打診を受けました。市と協働ということで3年間行いました。その平成21年に、偶然にも建設業界と一緒にあって、空き家調査と民泊事業を行いました。

民泊事業では、まず散居村の展望台を紹介すると、「何て素晴らしいのだろう」と皆さん感動されます。そうすると、「散居村の中を見たい」ということで、素晴らしいアズマダチの古民家を案内します。ところが、空き家が非常に目立つのです。平成21年11月から、空き家調査を会員のボランティアで調査をしたのですが、約180軒位の空き家がありました。その後、自治振興会の協力を得て、識解調査をしました。すると、約305軒があがってきました。丁寧に調査すれば、もっとたくさんあるのではないかと考えられます。

空き家は平成10年頃から増え、砺波の文化が無くなるのではないかと非常に危惧しており、現在はその空き家を調査して、活用して住んでもらいたいというような運動を始めています。

本江： 散居村の活用を議論する上では、課題をしっかりと整理する必要があると思います。「砺波」と「散居村」というネームバリューは、何に活用し、どのように生かすのかという手法が、まず必要ではないかと思えます。また、どのようなまちづくりを進めるのか、いかに共通認識を図るのが重要であると考えています。

そのためには、ある程度の仕掛けが当然必要になってくると思いますし、勿論、どのターゲットに絞るかも非常に大切なことになると思います。色んな芸術品や工芸品だとか、ガラス工芸とか色んなものにターゲットを絞って、散居村を活用していただくということも一つ手だとも思えますし、空き家で和紙を作っていたりなど、南砺とのコラボレーションも非常に楽しめるのではないかと考えます。

町内会や地区などの小さなエリアから、そこに住む多くの住民の皆様が問題意識を持って、個々に色んな議論をしながら、まちづくりを考え取り組んでいかないといけないと思います。そのためにも、散居村については、地域の中で住民が議論する機会からモデル的な事例を作り上げ、ビジネスに波及させていくことが良いのではないかと考えます。また、色んなPRの仕方もありますが、メディア等を使って、色んな手法をもってPRしていけばいいと考えています。

原野： 最近の住宅傾向は、冷暖房というか空調関係に対する効率的な住環境が、一番重要視されていると考えています。中でも、キーワードはエコであり、素晴らしい複層サッシの中で高断熱の家造りなど、様々な方法で色々と取り組んでいます。また、太陽光とか高蓄熱機器とか、再生エネルギーの活用が推進されています。ヒートポンプというものがあり、空気中の二酸化炭素とかを真空にして圧縮することによって熱が出るのですが、そういうものを利用した床暖房が最近ものすごく普及しています。

そして、建替えの新築というものが当然ある訳でして、ワクノウチや古材とか、そういうものをなるべく壊さない方法もあります。また、リフォームは、正直なところ耐震補強とか基礎の補強などに大変なお金がかかります。例えば耐震であれば、弱いところのみを補強するという方法もありますので、安くリフォームもできます。そのような、色んな事例、砺波の地域の風潮にあったような住まいづくりを紹介していくことが、私どもの務めでないかと考えています。

尾田： 空き家対策に関しては、空き家情報バンク、砺波暮らしの体験宿泊などが行われていますが、一番ネックになるのは、持ち主の意識が非常に薄いことです。空き家が地域に迷惑を掛けているという認識がなく、思い出をそのままにしておきたいという思いがあるように思えます。また、仏壇であるとか、持ち主の家具、そういった物をすぐに片付けることが資金的にも大変であり、支援があればいいのかと思ったりもします。

昨年、何回か民泊とかで、東京のほうから若い人をお迎えしました。富山から東京は飛行機で1時間なので、実に近いということから、「大きい屋敷を借り上げて事務所に使いたい」と言っておられた方が何人かおられました。「東京で1か月仕事して、また砺波で1か月仕事する。こんな素晴らしい贅沢はないな」というようなことを言っておられ、砺波で事務所を開いてもらうこともいいと考えています。

この会場の後ろのほうに綺麗な写真があります。この写真というのは、民泊に何回も参加していただいております名古屋の方が、昨日泊まって、今日参加するために来ておられます。砺波の人に再認識してもらいたいということで、砺波以外の人たちが、「非常に砺波が素晴らしい」と言っておられます。

私は、工場誘致も大事なのですが、人材誘致、アニメをやる人とか、アーティストとか、そういった人たちを誘致できれば砺波が面白くなって、ひとつ上の砺波ができるのではないかと思ったりしています。

宗景： 最近住宅事情も変わり、色んな建材等もでき、寒さに耐えられる生活空間となる住宅の建て方があり、昔のアズマダチはなくて、垂直水平、真四角の家ができています。そうすると、植える木も考えていかなければならない。スギでなく、何を植えればいいのかと相談を受けますが、広葉樹であり、落葉樹であり、実のなる木、それで紅葉して心が癒やされるものの方がいいと思っています。それと維持管理に負担のかからない木ということです。実のなる木、ブルーベリーとか、食べながら庭を楽しむ、散居村の景観を楽しむことが必要であり、1人1人が緑を眺めて生活していくことが一番大事でないかと思っています。

住宅の建て方のほか、庭造りにおいても変わってきており、従来の住宅が小さく建て替えられ、その中に緑の空間が出来ています。しかし、車社会の中で車庫を作ったり、舗装したりしてだんだんと緑の空間が少なくなっています。今は、玄関、前庭の毎日出入りするようなどころを変化に富んだ庭にする。あとは、ダイニング、キッチンから庭を眺めながら飯を食うとか、そこで一家団らんを楽しむなど砺波の景観を残していかなくてはならないと思っています。

空き家対策に関してですが、街の中にも多くの空き家があり、一部は壊さなくてはならないことから、そこにミニ庭園を造って、そこで名物を食べながら団らんするなど、街の中に人を呼ぶことも大事でないかと思っています。

また、砺波市では生け垣の奨励をしており、暑い夏には何度か気温が下がります。そういうことも踏まえて、奨励していただきたい。

川邊： 家にもカキの木が1本植えてありますが、去年の秋から私もプルーンの木を2本買いまして、今育てている最中です。実のなる木は、収穫の喜びや食べる楽しみがあり、子どもたちの成長過程にはとても良いことだと思います。

また、広い敷地ということで子どもたちが楽しく遊んでおり、親にとっても安心でき、こうした広い空間があることは、散居村の中の1軒1軒が保育所のようなものであり、田んぼや畑など自然と触れ合うことができ、穏やかな人として育まれることを期待しています。

現在、主人の親と同居しており、気遣う面もありますが子どもたちの成長にはとても良いことだと思います。また、地域のコミュニティから、子どもたちはより多くの方々と接する機会があります。このことにより、地域の伝統や文化を学ぶことができるなど、地域の連帯感を活用することができないか。

こうした住環境である散居村をどのように生かすのかとなると、明確な意見を言えませんが、子育て環境に良いところであることは感じており、この魅力を広くPRしていく必要があると思います。

原野： 散居村での暮らし方や住まいづくりは、個人の価値観によって作り上げているものであり、一応に提案できるものではない。そのような中で、地域の特性に合った様々な暮らし方を紹介する、例えば「散居村の住み方の創造塾」などを企画していくことも一つと思います。

業界としては、大きな家を管理するだけでも大変なお金がかかることから、色んなローコストによる住宅改修の事例を挙げて、住み継いでいく提示が大事かと思っています。中には、アズマダチとかの伝統ある建物があり、本当に壊してしまえば、ただのゴミになってしまいます。外観を生かしたリフォームとか、エコ循環型を意識したリフォームも推奨し、そういう物件については、支援制度を整えればいいと考えております。

また、日本一大きな屋敷と住宅を利用して、一部を事業者に貸し与えるとか、そういう事業も、もっともっと発信していく必要があると思います。都会には見られない癒やしの空間の中で仕事をしたい方もたくさんいらっしゃると思います。こういうことができるよと、発信していくことで必要と考えております。

いずれにしても、散居村を楽しむということ。そして、散居村で豊かな暮らしをするということについて、まちづくりのテーマが必要かと思われまます。

本江： まちづくりへの前進するポイントとしては、まず市民の皆様の熱い思いが最も大切だと考えます。その取組は、行政など一部の関係者によるものだけではなく、問題意識を持った人、また、散居村のみならず、あらゆる分野でまちづくりを考える母体も必要であると思います。また、こうした取組を進めるうえで、資金が必要になってくると思っており、多くの市民の総意が得られる目標を掲げ、資金調達から進めることも重要だと思っています。その資金を有効に活用することで、新たなビジネス展開が期待できると考えています。

市民の皆様は、主体的に活動を通じて地域づくりの一員となる機運を高めていかなければならないことも大切なことだと思っています。そのためには、顔が見える範囲の中でのコミュニティで議論していくことが最も大切であり、地区単位や自治振興会単位、色んな取組により成功すれば波及していくものではないかと思っています。また、老若男女問わず参画し、生業をもたらすことが理想であると思っています。

特に、散居村は運ぶことができない砺波の特産品であり、ここへ来て堪能いただくしかない商品であると思いますので、この商品を題材に景観や民泊などに生かし、新たなビジネスとして経済の活性化つなげていけばいいのではないかと考えています。

川邊： 今は、子どもが主役の生活であり、幼稚園などで知り合った方々と活動を楽しみ、散居村の中で子どもたちがのびのびと育っていくことが大きなメリットだと思います。また、砺波市においては、保健や医療な

どの成長を支援する制度も魅力的で、充実していると感じています。

特に、子育てに関しては、穏やか人づくりのためにも、ここ散居村には大きな家があるのだから多世代での同居がいいと思っていますが、夫婦と子どもだけの世帯もあるので、子育てをキーワードにした地域コミュニティを構築することも必要だと思います。しかし、地域内での連携を重視し過ぎて、過重な負担とならないように進めていくことが大切だと思っています。

宗景：これからの散居村の形態を維持していくには、家族全員で木を植えて手入れし、楽しむという形態にもっていかないと屋敷林も育っていかないとと思っています。まず、大人が語る前に、子どもたちの環境を整えてやるということが大事でないかと思っています。その中で、遊び心があることによって、緑を学び、緑に親しむのだと思っています。例えば、庭の中で遊べる緑、芝生でもいいですし、苔を張ったりすることが大事です。

昨年、サクランボの木を学校に植えてきました。そうすると、サクランボがいつ成るのかと、子どもたちが真剣になって見てきます。また、卒業生が「いつサクランボ成るが」と緑に関心を持ってきます。このように、ちょっと摘まんでみたいと感じさせることから、緑に関心を持たせるようにすればどうかと思っています。そして、砺波散居村の生業になればいいと考えています。

尾田：一昨年、土蔵の会では、「砺波の元気は空き家の利活用から、空き家を地域資源として利活用を考える」というテーマでシンポジウムを行いました。市民にとって空き家は非常に関心が高く、関心が高いということは散居村における空き家の増加が多いことを認識されているものであり、地域社会の存続に大きな危機をもたらします。特に、ここ1、2年になって吹き上げた問題ではないかと思っています。この空き家の実態を調査して、地域の将来はどうなるのか、しっかりと考えなくてはならない。この空き家の利活用をすることによって、人口の増加、それから交流人口の増加が求められるのではないかと思います。

散居村は古くから研究であるとか勉強会、本当に多く積み重ねられています。その積み重ねをこれから市民が研究から実践、勉強から行動、そして提案から行動、それから市民の無関心の打開ということが求められているのではないかとと思っています。市民自らが立ち上がり、保全活用の実践が求められるものであり、それによって地域の産業であるとか、経済・文化、個人の精神性、そういったものが活性化され、散居村のブランド化、地域の魅力として発信につながるものです。このことは行政でなく、市民自ら発信することが大事であり、それが一つ上の砺波ではないかと私は解釈しており、その応援は行政とともにやっていく、協働という形が一番いいかと思ったりしています。

出村：これらのことを砺波全体で考えていくことを意識して、豊かで幸せになることを求めていく必要があると思います。循環型の生活スタイルが見直され、注目されてきており、市民ニーズを見極める必要がある。現代に即した生活スタイルを議論する必要がある。あるいは、空き家の活用と一体的に散居村をPRしていく。広々とした空間が散居村の特長であるということについて情報発信をもっともっとしていくべきである。宅地の広さ、家屋の広さ、それと特長ある屋敷林、住まいというものを考えていく。生活空間に加えて、交流や生産の空間としての活用というものもあります。あるいは、健やかな子育て環境として適しているし、遊び場、散居村の保育所という話もありました。

それから、今後の発展に向けての具体的な話として、散居村との調和による地域の発展に向けては、個性あるまちづくりを進める上での組織と資金というのが必要、環境事業への取組も必要であるとのことですが、周辺の景観との調和を図る修景、リフォームという面についても支援が必要であるとのことですが、これについては行政支援ばかりではなく、住民あるいは企業、市民レベルでの応援支援体制というものも作っていく必要であると思っています。また、空き家のリフォームを行って提供していくシステムを作っていく必要があることもあります。空き家については、村部での空き家対策、それから町部、あるいは団地の中にも空き家が出てくる時代になりました。それらの防犯対策も含めた新しい空き家対策も真剣に検討していく時期に来ていることであります。

いずれにしても、散居村を活用するのであれば、手遅れとならないうちに、今のうちに進めなければならないと思う訳であります。そのためにも、市民の皆様と行政が一体となって、地域の課題として考えていく必要があります。また、意識啓発と支援体制が重要となってまいります。目に見え、肌で感じられる美しさ、快適さが体感できれば、多くの皆さんの共感が得られるものだろうと思います。市において取り組まれています景観に関する計画の良し悪しについても、これを機会にそれぞれ考えていただき、また持ち帰っていただき、家族家庭で、地域で話し合っていたいただきたいと思います。

今日の話として散居村というのは、家屋や屋敷林、そして農地という3つ要素があります。このことのみならず、文化や生活など様々な要素が関わっています。これらを含めて散居村を活用する手順としては、生活スタイルを意識しながら、空き家も活用して地域風土に合ったまちづくりを進める。また、散居村の特長である広々とした空間を生かして、周辺景観との調和を図り、個人個人が楽しみながら経済的な豊かさを求めていく必要がある。そのためにも、子育てをキーワードにするなど、地域住民が自らの課題として考えていく必要があると思います。

住民自身が、砺波を好きになって、いいところ見つけて、楽しんでいく。楽しくなければ始まらない。楽しいから始まっている、続いていくという地域づくりになっていけばいいかと思っています。 以上